

戸建住宅におけるまちとの繋がりに関する研究 その② ：親和図からみたまちとの繋がり設計思考

正会員 ○北島陽貴*¹ 正会員 藪谷祐介*²
同 有原千尋*¹ 同 北野まつ葉*³
同 谷内遥香*⁴ 準会員 栗原稜*⁵

言説分析 KJ法 設計論
コミュニティ 内外連続 公共性

1. 背景と目的

前編(その①)ではまちとの繋がりを目的とした戸建住宅を対象に言説分析を行い親和図を作成した(前編図1)。本編では作成した親和図を元に、設計者の戸建住宅に関する言説から「まちとの繋がり」における設計思考を考察する。

2. 親和図から見るまちとの繋がり

「まちと繋がる工夫」について、「方法」と「目的」を縦軸に、「時間的側面」と「空間的側面」を横軸にして、言説を4つに大別し、周辺環境・敷地環境・建主・効果を含む「設計の背景」も示し、カテゴリは実線、ラベルは破線で囲い図示した。以降、本稿の文中においてラベルは方法：[]、目的：{}、設計の背景：《》、カテゴリは【】と表記する。

2-1. 言説のカテゴリ

a. 時間的側面に関する方法：

【地域・歴史の活用】では「まちなみと形・仕上げを合わせる」のような周辺環境との呼応に関する言説が多いが、「まちなみと形・仕上げを変える」「既存を変える」のようなまちなみに変化を与える言説も確認できた。周辺のまちなみに積極的に介入するような検討が行われていると考えられる(図1)。

一方、【プロセスの重視】では確認された言説が少なく、コモンスペース(以下CS)に関する研究で確認された時間をかけた関係の築きに関する言説は確認できなかった。個人の所有物である住宅では設計・施工プロセスにおけるまちとの関係性を重要視していないと考えられる(図2)。



図1* (2020年8月号)



図2* (2016年12月号)

b. 空間的側面に関する方法：

【空間の連続性・囲み方】では、大開口やヴォリュームを切り欠く「抜け・隙間を生み出す」に関する言説が多く、それとは逆に腰壁や袖壁による「半端な壁・ヴォリューム

で区切る」に関する言説も多く確認できた。積極的に外部に開くと同時に、適度に視線を遮りプライバシーを確保することも検討されていると考えられる(図3)。

【空間の設え方】では、内外境界を曖昧にする「内部・外部的な形・仕上げ」や、多様な活動を許容する「スケールアウトさせる」「多様な配置・形・仕上げ」に関する言説が多く確認できた。日常的な使い方だけでなく、様々な使い方のできる空間を検討されていると考えられる(図4)。



図3* (2017年11月号)



図4* (2014年12月号)

c. 時間的側面に関する目的：

【まちへの配慮】では「まちなみとの連続・調和」「魅力的なまちなみの形成」「まちの魅力の顕在化」に関する言説が多く確認できた。まちへの敷地の提供や地域コミュニティのきっかけなど、個人の所有物でありながら公共性も併せ持つよう検討されていると考えられる(図5)。

続いて、【建主・訪れる人の活動/近隣コミュニティ】では、まちの季節や時間の移ろい、周辺環境の変化に合わせて建主が柔軟に生活できる「多様な活動の許容」「将来的な自由度」に関する言説が多く確認できた。建主が長い時間を過ごす住宅では、家族の成長や周辺環境の変化への柔軟性が意図されていると考えられる(図6)。



図5* (2017年5月号)

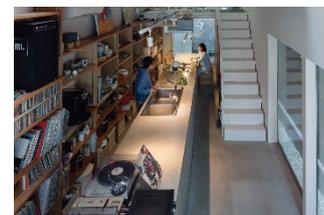


図6* (2014年6月号)

d. 空間的側面に関する目的：

【内外の連続・遮断】ではまちなみやまちのアクティビ

ティを取り込んだり、内部の生活感が溢れ出す〔視覚的な連続・視線の導き〕や、外部・半外部での活動をしやすい〔動線的な連続・出入りしやすい〕に関する言説が多く確認できた。視覚・動線の連続性によりまちとの繋がりを生み出すことが検討されていると考えられる(図7)。

また、【魅力的なイメージの形成】では地域の人々が訪れやすい雰囲気や建主を外部・半外部に惹きつけるような〔親しみやすい・入りやすい〕が確認できた。また、訪れにくい雰囲気や建主が落ち着いて過ごせるような〔安心できる・入りにくい〕に関する言説も同程度確認できた。戸建住宅では地域の人々が集いやすいようにすることで地域コミュニティに配慮しつつも、住空間のプライバシー性を高めるよう意図されていると考えられる(図8)。



図7* (2018年1月号)



図8* (2013年1月号)

2-2. 言説のラベル

ラベルに着目すると、〔視覚的な連続・視線の導き〕〔抜け・隙間を生み出す〕が多く確認できた。視覚的な連続は単純な操作で取り入れられる繋がりであり、内部の生活が外部から感じられるまちとの繋がりも検討されていると考えられる(図9)。

続いて設計の背景では、周辺環境に関する言説が多く、良好な環境だけでなく悪条件に関する言説も多く確認できた。魅力的な周辺環境だけでなく、好ましくない周辺環境との関係性も考えられている(図10)。



図9* (2016年月号)



図10* (2014年2月号)

建主については《子供のいる・若い建主》が多く、逆に《年配・自宅にいる時間の長い建主》という言説も確認できた。子育て世代では住宅内に限定されない生活が求められ、自宅にいる時間の長いお年寄りではまちの人とのコミュニケーションが求められるためだと考えられる。

2-3. 言説の因果関係

解説文より「方法」「目的」「設計の背景」について因果関係を確認し、カテゴリー間とラベル間で各々5つ以上確

認できたものを図示し、カテゴリーを実線、ラベルを破線で繋げた。また、因果関係の方向は線の太い方から細い方となるように図示した(前編図1)。因果関係の全体的な傾向として、〔抜け・隙間を生み出す〕や〔断面方向に距離を取る〕による〔視覚的な連続・視線の導き〕を始めとする空間的側面に関するものが多く確認できた。

カテゴリーでは【空間の連続性・囲み方】と【内外の連続・遮断】の因果関係が最も多く、その中のラベルでは〔抜け・隙間を生み出す〕と〔視覚的な連続・視線の導き〕の因果関係が多く確認できた。さらに、〔視覚的な連続・視線の導き〕と〔魅力的な環境・まちなみの形成〕〔空間・生活の広がり〕の因果関係が確認され、【内外の連続・遮断】だけでなく【まちへの配慮】や【効果】へと波及している。敷地内・住宅内とまちとの視覚的な連続が住宅だけでなく周辺環境を向上させることが意図されていると考えられる(図11)。

次に多かったのは【空間の連続性・囲み方】と【内外の曖昧さ・明瞭さ】の因果関係であった。その中のラベルでは〔形状・レベル・仕上げを合わせる〕と〔一体感のある・境界の曖昧な空間〕の因果関係が多く確認できた。内外の一体感によって住まい手の生活が外部へと引き出されることが検討されていると考えられる(図12)。



図11* (2015年12月号)



図12* (2019年5月号)

3. 総合考察

戸建住宅におけるまちとの繋がりでは2-3で触れたように、敷地内・住宅内とまちとの視覚的な連続によって周辺環境も向上させることが意図されており、時間的側面と空間的側面が横断的に検討されている。これは空間的側面・時間的側面の相乗効果が期待できるものもあり、双方からの検討が重要であると考えられる。また、〔断面方向に距離を取る〕〔抜け・隙間を生み出す〕が同時に検討されている事例もあり、プライバシーの確保も重要な戸建住宅では、住空間の開放する部分と閉じる部分のバランスや閉じつつ開くような検討も重要であると考えられる。

注

* 新建築住宅特集から引用 (() 内は掲載年号を示す)

参考文献

1) 竹田和行, 菅沼響子, アルマザン ホルヘ: コモンスペースの設計論に関する研究 (その1): コモンスペースにおける地域への繋がりを目的とした設計思考, 日本建築学会計画系論文集 第85巻 第778号, pp.2807-2817, 2020

*1 富山大学大学院芸術文化学系研究科大学院生
*2 富山大学学術研究部芸術文化学系講師・博士 (デザイン学)
*3 グリーンノートレーベル株式会社
*4 株式会社トミソー
*5 富山大学芸術文化学部学部長

*1 Graduate School of Arts and Culture, Toyama University
*2 Lecturer, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Doctor of Design
*3 Green Note Label Inc.
*4 Tomiso Corporation
*5 Undergraduate, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama